

---

# お寿司屋さん物語

メロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お寿司屋さん物語

### 【Nコード】

N4880C

### 【作者名】

メロ

### 【あらすじ】

お寿司屋を舞台にしたギャグです。

ある日、寿司への熱い情熱もつ男が現れた。

彼の名前はギラク。

15歳だ。

お寿司を食べるのも、投げるのも、踏み潰すのも大好きなお寿司人間！

「そろそろ、俺も寿司を握る側の人間にならないといけない」

ギラクはもう食べたり、投げたり、踏み潰す側の人間では満足いかなくなっていた。

そんな寿司人間。

右のポケットから酢飯を取り出して、一口食べる。

歯にしみる！！！！

そんな寿司人間。

すると目の前にちょうどよく寿司屋！！！！

「よし、ここで修行しよう！！」

ギラクは寿司屋のドアを開けた、そして閉めた！！

フエイント！！

そしてドアをぶっ壊す！！！！寿司屋にドアなんていらぬ。

ギラクは寿司屋の中に入るとすぐに支度して、カウンターに立った。寿司人間はもう、我慢できないのだ。

すると、変なおじさんが怒鳴った！！

「おまえは誰だ！勝手に入ってくるな！」

なんて好戦的な変なおじさん！！！！

ギラクは2000から3000発変なおじさんを叩いたり蹴ったりして、冷静に話を進める。

「俺はギラク！寿司人間さ！寿司を作りたいんだ！ここのご主人様は、どいつだ！弟子になりたい」

「俺がご主人様だ！！！！」

「えええ!!!」

ギラクはうつかりご主人様を2000から3000発叩いたり蹴ったりしてしまったのだ。

これはすごくまずい。

「なんだ！いきなり！おまえは！俺はこのご主人様で、寿司クラッシャー、ババヨ！これからよろしくな」

ギラクの熱い思いが伝わって弟子にしてくれた！！

びっくりして、ギラクはおもらししちゃったの。

「親方びっくりしておもらししちゃった・・・」

「はははは！！なあに、俺もだよ！」

親方もおもらししていた、しかもギラクよりも量が多い！！

さすが親方！！

「他には人はいないんですか」

「みんな俺が包丁で刺したりした」

厳しい！！！寿司の修行は厳しい！それについてこれない人は止めるしかないのだ！

止めるなら今のうちだぞと、親方はギラクに言ってるようだ。

でもギラクの寿司への思いはすごいので大丈夫だ。

「俺！やります！寿司握ります！」

「いいか、俺は寿司の握り方を教えたりはしないぞ！目で盗め！教えられた寿司なんて寿司じゃねえ！苦労して自分の力で生み出すのが寿司だ」

「ああ、わかったよ」

ギラクは言った。

店の中にはCDラジカセを大音量で鳴らし続けている。

こついう心遣いで、寿司は何倍もおいしくなる。

壊れたドアからお客さんがやってきた。

「いらつしゃい！！席に座ってください」

お客さんをギラクが包丁を突きつけて誘導する！

この緊張感！！

「お客さん、ちょっと待ってて！今、体を清めるから」

親方は水中眼鏡を掛けて水浴びをし始めた。

寿司を握るにはすごく精神力が必要だから、こうやってまず集中力を高めていくのだ。

もし、中途半端な気持ちで寿司を握ったら爆発してしまうこともある。

それほど寿司と言うのは難しいものなのだ！！

「お客さん・・・親方。集中して来てますよ！！すごい、まるで日本刀のようだ。触れば切れてしまう」

ギラクは親方の集中力に驚いておもらししちゃったの。

親方が水中眼鏡を掛けて水浴びをし始めてから1～2時間。

「う・・・うぐ。今日はもう止めだ！もう、いやだ！魚がない！出て行ってくれ」

なんと肝心の魚を買うのを忘れていたのだ！！盲点！！

いくらい腕があっても、魚がないのではどうにもならない！！！親方ほどの寿司職人でもたまには魚を買って忘れてしまうことがあるのだ。

油断という落とし穴はいつでも口を開けているということだ！

なんと親方はお菓子を買っていて、肝心の魚を買うことを忘れた。

お菓子で寿司を作ることできるが、それでは親方のプライドが許さなかった！！

頑固な寿司職人魂！！

ギラクはすぐにお客を投げ飛ばして、腹を蹴飛ばして店から追い出す！！

「いいか、寿司は魚がなきゃできないんだ！わかったか」

親方が怒鳴る！

「ああ」

魚がないので今日は閉店することにした。入り口を、ブロックで塞いだ。

寿司屋なのに魚がない時は、客をおいかえればいい！

「ギラク、俺は今から魚をスーパーに買いに行く！！！！ついてきな」  
「ああ」

ギラクは包丁を振り回して、親方の三センチ後ろを歩く。

親方の仕入れはいつも、近くにあるスーパー永眠。

新鮮な魚が安く手に入る、丸秘スポットだ。

「俺はいつもここで、魚を揃える！なんたって、魚だけじゃなく野菜や肉も一緒にかえるからな！！便利だ」

一つのスーパーですべてそろろう！忙しい寿司職人にはスーパー永眠は本当にありがたい。

「ああ」

親方に続いてギラクもスーパー永眠に入る。

まずはお目当ての魚のコーナーにやってきた二人！

「仕込みで大事なのは魚の目ききだ」

親方はそういうと、パックのマグロを指でギューってやった。

「ギューってやると指がすごいめり込むのはダメだ！古い！」

二人はパックのマグロをみんな指でギューってやった。

「これだけ沢山パックのマグロがあっても、俺の目に適うものは少ししかねえのよ」

さすが親方！！魚の目ききにも妥協なし！

「親方！これなんてどうですか！」

ギラクは親方の目にパックのマグロを投げて、ぶつけた！！

親方は当たる寸前に、マグロのパックを手ではたき落とす！！でもそれが跳ね返って、親方の目にマグロが突き刺さった！なんか目からマグロが生えたみたいで滑稽だ！超バカ！！！！

魚を買い終わると、今度は野菜コーナーにやってきた二人。

「おお、うまそうな野菜があるじゃねえか！！どれ、買っていくか」

「親方！寿司に野菜がいるんですか？」

「ギラク、寿司は魚じゃなきゃいけないなんて決まりなんてねえんだよ！！石だつてフライパンだつてシャリの上にのれば寿司だ！！」  
さすが親方！！考え方が柔軟だ！

「まるで寿司は宇宙だ！」

「そうだ！宇宙だ！どこまで広く！そしてこれからも広がっていく！ギラク、おまえはシャリの上にどんな星空を描く？」

「なんか言ってる意味がわからない！ところで親方！野菜の目ききはとうするんですか？」

「野菜の目ききは難しい、野菜は硬いのもあれば柔らかいものもあるから……！」

野菜は魚よりも硬さがいろいろある。

「ではどうやって目ききするんですか？」

「魚の時とかわらねえよ！手でギユ・ってやるのさ」

親方は大根をギユ・ってやった！！

「大根は硬いからギユ・ってやつても……」

「そういう時は、硬いところに叩きつける……！そうすればいいんだ」

大根は折れた……！！

「わああ！すごい」

「これだけ野菜があっても、俺の目に適う物は少ししかねえ！みんな折れちまう」

親方はそう言いながら、野菜を次々に折っていく！

「ギラク！おめえもやってみろ！気持ちがいいぞ」

「はい」

野菜を叩き折るは楽しい……！！

二人は新鮮な魚と、野菜を仕入れて店に帰ってきた。

「やっぱり我が家はいいなあ！落ち着くよ！」

「親方！じゃあ、開店しますか」

「おう！」

ギラクは入り口のブロックをよけた。

早速、お客さんがやってきた。

「いらつしゃい……！席に座ってください」

お客さんをギラクが包丁を突きつけて誘導する！

この緊張感！！

「お客さん、ちょっと待って！今、体を清めるから」

親方は水中眼鏡を掛けて水浴びをし始めた。

寿司を握るにはすぐ精神力が必要だから、こうやってまず集中力を高めていくのだ。

もし、中途半端な気持ちで寿司を握ったら爆発してしまうこともある。

それほど寿司と言うのは難しいものなのだ！！

「お客さん・・・親方。集中して来てますよ！！すごい、まるで日本刀のようだ。触れば切れてしまう」

ギラクは親方の集中力に驚いておもしろしちゃったの。

親方が水中眼鏡を掛けて水浴びをし始めてから1～2時間。

「う・・・うぐ。今日はもう止めだ！もう、いやだ！シャリがない！出て行ってくれ」

なんと魚はあるが、シャリを炊くのを忘れていたのだ！！！盲点！！！！

いくらい腕があっても、シャリがないのではどうにもならない！！！！

親方ほどの寿司職人でもたまにはシャリを炊き忘れてしまうことがあるのだ。

油断という落とし穴はいつでも口を開けているということだ！

なんと親方はテレビを見ていてシャリを炊くのを忘れた。

シャリの変わりにガムで代用して寿司を作ることはできるが、それでは親方のプライドが許さなかった！！

頑固な寿司職人魂！！！！

ギラクはすぐにお客を投げ飛ばして、腹を蹴飛ばして店から追い出す！！

「いいか、寿司はシャリがなきゃできないんだ！わかったか」

親方が怒鳴る！

「ああ」



シャリがないので今日は閉店することにした。入り口を、ブロックで塞いだ。

寿司屋なのにシャリがない時は、客を追いかえせばいい！

「ギラク、俺は今から米をスーパーに買いにいく！！！！ついてきな」

「ああ」

ギラクは包丁を振り回して、親方の三センチ後ろを歩く。

親方の仕入れはいつも、近くにあるスーパー永眠。

新鮮な米が安く手に入る、丸秘スポットだ。

「ここは米だつてあるんだぜ！すごいだろ」

米までそろう！忙しい寿司職人にはスーパー永眠は本当にありがたい。

「ああ」

親方に続いてギラクもスーパー永眠に入る。

早速、米コーナーにやってきた二人！

「米ももちろん目ききが必要だ」

親方はそういうと、米の袋を指でギューってやった。

「ギューってやると指がすごいめり込むのはダメだ！古い！」

二人は米の袋をみんな指でギューってやった。

「これだけ沢山の米があつても、俺の目に適うものは少ししかねえのよ」

さすが親方！！米の目ききにも妥協なし！

二人は米を手に入れた！！！！

「これでシャリもそろいましたね」

「まだだ！酢がなきゃただの御飯だぜ！御飯じゃ、おにぎりとかわらねえからな」

酢飯じゃない寿司は、おにぎりと変わらない！！！！

二人は調味料コーナーにやってきた。

「もちろんお酢にもいい、悪いはある！瓶に入ってるから、ギューってやつても分らない」

ギューってやつてわからないのでは手の打ちようがない！！！！

「じゃあどうすればいいんですか！」

「割って、少し舐めればいいんだ！舐めて、古かつたら返せばいい」  
なんてすごい発想！！

「そうか！」

二人は酢の瓶を棚から落として割って、少し味見する！！

「親方！どの酢がよくて、どの酢が悪いかよく分かりません！」

「そりゃあ、そうだ！俺もわかんないからな！ただ、酢の瓶を割るのって気持ちがいいだろう？」

「はい！すごく気持ちがいいです」

「そうだ！その、楽しむ心が大事なんだ！寿司は心！楽しい心で、寿司を作らなきゃ食べる人も楽しくならないぜ」

二人はお酢を手に入れた！

これでシャリが作れる！もう、これで寿司は出来たようなものだ！！

二人は米と酢を仕入れて店に帰ってきた。

「やっぱり我が家はいいなあ！落ち着くよ！」

「親方！じゃあ、シャリを炊きますか」

「おう！」

親方は店の奥から電子ジャーを持ってきた。

こいつはスイッチひとつで御飯を炊いてくれる優れもの！！忙しい寿司職人には電子ジャーは本当にありがたい。

「待つめのんどくさいから、早炊きにしよう」

親方は早炊きに合わせて、スイッチを押す！これで、通常よりも早く米が炊けるのだ！

すごい！寿司職人と電子ジャーは切っても切れない関係なのだ！

「後は待つだけだ」

二人は米が炊けるまで、オセロを楽しむ。

でも、二人ともルールを知らなかったのですぐ飽きた！！！！

炊き始めてまだ10分位だが、電子ジャーをあけて様子を見る！！

「まだ、炊けてないな」

親方は用心深い！

「いいか。電子ジャーのすばらしいところは、炊ける前にご飯をいたずらしても炊けるところにあるんだ！こいつはカマドなんかじゃ絶対にできないことなんだ」

親方はまだ炊けていないのに、電子ジャーを開けたり閉めたり、手でかき混ぜたりご飯にいたずらしている。

「へええ！」

ギラクは親方のいたずらを見逃さないように、しっかりと見つめている！！！！

職人の技は目で盗む！！！！

「おーし、炊き上がったぞ！！！！見てみようか！！」

電子ジャーを開ける！！！！

「すごいや！！お米の形がなくなって、ベトベトしている！まるで沼地みたいだ」

「食べてみる」

「え！この沼みたのを？食べられるの？」

「もちろん！」

親方は自信満々！！！！

ギラクは手で掴むと思い切って、親方の口に突っ込んだ！

「げほ！！」

親方はもぐもぐして飲み込んだ！！！！

「うまい！この甘み！この歯ごたえ！カマドで炊いた飯となんか比較にならない」

どうやら食べてもいきなり、死んだりしないようだ！

安心して、ギラクも米を食べる！

「米の一粒一粒が形がなくて噛まなくても食べられて、のどを通ると同時に甘い米の味がやさしく口の中に広がっていく！！！！」

「ふふふ、これだけじゃないぜ」

親方は炊き上がった米を電子ジャーごと投げる！！！！

「どういうことですか！？」

ギラクは親方の突然の行動に驚いておもらししちゃったの。

「ムシャクシャするんだよ！」

寿司職人はストレスがたまりやすい！！

ストレスがたまった時は、我慢しないで電子ジャーを投げればいい！！

「あああああ、すつきりした！ギラク、おまえも投げてみる」

「はい」

親方に電子ジャーを投げつける！！

電子ジャーは親方の肋骨をポキポキ折った！！

「ぐぼあ！！！」

「わお！！ストライク！はああ、すつきりした」

親方の苦しむ姿を見ると、ギラクは本当に楽しくて笑いが止まらない！！！！

「いつまでも遊んでじゃねえ！！」

親方は痛めた肋骨をかばいながら言った。

その顔が面白くて、ギラクは親方の腹を蹴っ飛ばした。

「おう！親方の腹はあまり蹴ってはいかん！すごく弱い部分なのだから！」

寿司職人の肋骨が折れた時は、腹は蹴ってはいけない！！！！

「そんなことより、シャリを作りましょうよ！」

親方の腹なんてどうでもいいのだ。

「そうだな。じゃあ、酢を混ぜよう」

沼みたいなご飯に酢を入れた。

親方は職人なのでいちいち量は測らない、全部目分量だ！

熟練の技！！！！

「いいか、大体半分くらい入れる！これで酸味が出る！」

「はい！半分くらい」

「そして甘み・・・何を入れると思う？」

「・・・歯磨き粉ですか？」

「あんまり甘くないだろ、歯磨き粉は。もっと甘いものだよ」  
「バナナですか？」

「バナナ？うん！バナナおいしいよな！わしはバナナが大好きで、いつも寝る前に5時間バナナを振り回すんだ！すごく体があつたまるぞ！」

寿司職人は体のケアも怠らない！

ちよつとした体調の変化で、寿司は味を変えてしまつからである。

「酢飯に甘味をつけるのは、チヨコだ」

チヨコはポリフェノールとか入つてゐるらしい！！！！

「チヨコで甘味をつけるんですか？」

「そうだ！うちの酢飯の秘密はチヨコにある！！」

秘密をばらした！！

チヨコを酢飯に混ぜて、ミキサーで手早く混ぜる！！

「ミキサーはすぐ混ぜて便利だ」

忙しい寿司職人にはミキサーは欠かせない！！

「さあうちのシャリが出来上がったぞ」

なんか茶色いどろどろした物ができた！！

ここまでシャリにも手をかけるのが親方流！

「こんなシャリ、初めて見ました」

ギラクは驚いておもらししちゃつたの。

親方は茶色いシャリを舐める！！

「うん！甘い！ほら、おまえも一口やってみろ」

「え！はい」

ギラクもしょうがないので一口舐める。

「あつ甘い！そして酸っぱい！」

甘さと、酸味のどうしようもないハーモニー！！！！

「親方、こんなドロドロしたシャリで寿司が握れるんですか？」

「握れないよ！」

なんとこのドロドロしたシャリは握れない！！！！

「じゃあ、どうやって寿司を？」

「寿司は宇宙だって言つたら？握れないなら握らなければいい！俺の寿司は、ネタを食べたら・・・すぐにシャリを飲むんだ！！」

斬新な寿司！！！！なんと親方の寿司は、ネタを食べたらシャリを飲むスタイル！！！！

かつてこんな寿司が存在しただろうか？

「親方・・・」

「まあ、これはあくまでも俺の寿司！ギラク・・・おまえは自分の寿司を見つけるんだ」

「ああ！こんな寿司は邪道だよ」

シャリも完成したので店を開ける！！

ギラクは入り口のブロックをよけた。

早速、お客さんがやってきた。

「いらつしゃい！！席に座れ！」

お客さんをギラクが包丁をさきつぽだけ突きさして誘導する！

この緊張感！！

「お客さん、ちょっと待ってて！今、体を清めるから」

親方は水中眼鏡を掛けて水浴びをし始めた。

これをやらなければ寿司なんてできない！

寿司を握るにはすぐ精神力が必要だから、こうやってまず集中力を高めていくのだ。

もし、中途半端な気持ちで寿司を握ったら爆発してしまうこともある。

それほど寿司と言うのは難しいものなのだ！！

「お客さん・・・親方。集中して来てますよ！！！！すごい、まるで日本刀のようだ。触れば切れてしまう」

ギラクは親方の集中力に驚いておもらししちゃったの。

親方が水中眼鏡を掛けて水浴びをし始めてから1〜2時間。

「う・・・うぐ。今日はもう止めだ！もう、いやだ！やる気がない！出て行ってくれ」

なんと親方のやる気がない！！！！盲点！！！！

いくらい腕があっても、やる気がないのではどうにもならない！！！！

親方ほどの寿司職人でもたまにはやる気がなくなってしまうことがあるのだ。

無気力という落とし穴はいつでも口を開けているということだ！  
なんと親方は寿司を握るのがめんどくさくなってしまったのだ。

適当に寿司を作ることはできるが、それでは親方のプライドが許さなかった！！

頑固な寿司職人魂！！！！

ギラクはすぐにお客を投げ飛ばして、腹を蹴飛ばして店から追い出す！！

「いいか、寿司はやる気がなきゃできないんだ！わかったか」

親方が怒鳴る！

「ああ」

親方のやる気がないので今日は閉店することにした。入り口を、ブロックで塞いだ。

「ああ、寿司握るのめんどくせえ」

親方はごろりとカウンターに寝そべる。

「俺も！！」

ギラクもごろりとカウンターに寝そべる。

「だいたい、仕入れがめんどうなんだよ」

親方は仕入れがめんどうなのだ！

「あ！俺もそう思うよ、親方！」

「やつぱり！そうだ、これから仕入れやめよう！」

これから仕入れはしない！！

「いいね！」

「でもそうするとネタがないな」

仕入れをしないと、寿司ネタがないので困る。

「じゃあ、仕入れはしますか？」

「えーめんどくさい！でも、仕入れしないと寿司ができないからしようがないか」

めんどくさいが、寿司が作れなくては困る！！！！

まったく職人泣かせな問題である！！！！

ジリリリリリ、電話が鳴った！

「はい！地獄への使者です！え！？僕ですか？親方です！今からですか？ええ、いいですよ」

地獄への使者と言っのは、この寿司屋の名前です。

「どつたの？親方？」

「月刊寿司の編集から電話きて、取材したいんだってよ」

親方はカウンターでごろごろ転がっている。

「すごいじゃないですか！有名になっていっぱい客が来ますよ」

「うん・・・でも、俺。今、やる気ないんだよね！おまえ、寿司作っていいよ」

親方のやる気がないおかげで、チャンスがめぐってきた！！！！

「いいんですか？」

「いいよ。もう、寿司握れるレベルだよオマエは」

「はい、そう思っていました」

「俺は、寝そべってみるから」

「はい！邪魔すんなよ」

ギラクは邪魔な親方を蹴り飛ばして、店の隅に追いやった！！！！

「すいません！月刊寿司のポストですけど取材にきました」

「いらつしやい！」

ギラクを包丁を振り上げて切りかかる！！！！

ギリギリのところで急所は、はずして滅多斬り！！！！

ちよつと脅す接客！！！！

「うわあ！」

「お待ちしました！中へどうぞ」

と言ってポスのケツをギラクは蹴り飛ばす！

お客に厳しい姿勢を見せる！！！！

「あの・・・親方はいますか」

「親方ですか・・・さっき刺しました。なので、僕が寿司をだします」



「そうですか。じゃあ、おまかせで握ってください」

ギラクの寿司の腕が試される!!!

まずこないだ仕入れた魚から出す!!

パックのマグロだ!

でも、冷蔵庫にいれなかったのでだいぶ痛んでしまった。

痛んだ、魚をおいしく食べさせるのも寿司職人の腕のうちだ!!

痛んだマグロを斬る!!!

「あああ!俺は人を斬る包丁はあるけど、魚を斬る包丁は持っていない!!」

なんとギラクは人を斬る包丁しか持っていない!

これではせっかくの痛んだマグロも調理できない!!!

「考えろ!何かあるはずだ・・・そうだ」

ギラクは外に飛び出して、石を拾ってきた!

そして、その石で痛んだマグロを滅多打ちにして切り刻んだ!!!

アイデアが困難な状況をぶっ壊した!!!

「よし!でもこのままじゃあ、痛んだマグロってことがわかってしま・・・そうだ」

ギラクは切り刻んだマグロを、ミキサーの中に放り込んだ!!

「そして、甘みを出すためにチョコ!これで色もごまかせる!」

茶色い、生臭い液体ができた!!!

ギラクは茶色い、生臭い液体と茶色い、どろどろしたシャリをポスに投げつけた!!

「うぐ!!!あの、これ?」

「交互に飲んでください!」

「醤油とかないんですか?」

「ほしければ、自分で買って来い!」

ギラクはとりあえずおもらししちゃったの。

「では飲ませていただきます」

ポスは交互に茶色い液体を飲む!!

「おおお!甘い、そして生臭い!」

「秘密はチヨコさ！」

秘密をばらした！！！！

「では、次の寿司に移ります！！」

ギラクは意味もなくポスをひっぱたいた！！！！

ストレス解消！！！！

もうスーパーで買った材料はなくなった。

「こまったぞ！もうネタがない！こうなったら生ゴミを拾ってくるしかない！」

寿司職人はネタに困ったら、生ゴミを拾いにいくのだ！！

「次のネタはなんですか？」

なんて聞くもんだから、頭にきてポスの内臓を取り出して刺身にしてお出した！

「とりあえず、自分の臓器でも食ってろ！俺は、生ゴミを拾ってくるから！逃げたら、ひどいからな！」

もし、逃げ出したら包丁を持ってどこまでもどこまでも追いかけていくつもりだ！！！！

寿司職人はお客を逃がさない！！！！

絶対に逃がさない！！

ギラクは包丁を振り回しながら、近くの料亭にやってきた。

料亭ならば、いい生ゴミがあるはずだ！

そいつをいただいて、寿司にしてしまおうという作戦！！

料亭に包丁を振り回して入店！！！！

「俺は寿司屋だ！生ゴミをだせ！」

職人はいちいち細かく説明なんてしない、言いたいことだけ言う！

「お寿司やさんが、なんで生ゴミをほしがるんですか？」

「生ゴミで寿司を作るんだ！だから生ゴミをよこせ！」

「生ゴミで！？寿司を作るんですか？」

「くどい！生ゴミを出せ」

「は・・・はい」

料亭の板前は、生ゴミを持ってきてくれた。

「本当に生ゴミですけど」

「俺にとっちゃこの生ゴミが宝に見えるぜ！」

早速、店の中で使える生ゴミと使えない生ゴミを分ける！

「散らかすのはやめてください」

「おまえも生ゴミになりたいのか？」

ギラクは包丁を振り回す！！！！

「お！こいつはいい」

ギラクは生ゴミの中からいいものを拾うと急いで店に帰っていった！  
店に入るとポスが、大人しく店の中に座っている。

「お待たせしました！いい生ゴミ見つけてきたから、今から寿司を作るぞ！」

とりあえず拾ってきた生ゴミを並べる。

食べかけのマツタケ、何かの魚の身、食べかけのコロッケ！

「お客さん、ちょっと考えるから待ってて！」

ギラクは親方が飲んでそのままになっていた、缶コーヒーをポスに出す。

「飲みかけの缶コーヒーです！どうぞ」

「あ・・・はい」

これで4時間位は稼げる、この間に食べかけのマツタケ、何かの魚の身、食べかけのコロッケで作れる寿司を考える！！！！

親方の飲みかけのコーヒーで4時間位は稼げるので、しばらく休憩とる！

疲れた状態で、寿司を作ってもいい物はできない！！

「お客さん！疲れたので休憩します！その、親方の飲みかけの缶コーヒーを4時間位飲んでいてください！」

ギラクは暇なので、気持ちをリフレッシュするために店のカウンタ―にテレビを置いてゲームを始めた！！！！

RPGゲームで、勇者が魔王を倒すヤツだ！

ギラクは用心深いので、最初の町でレベル上げをする！！！！  
ざっと200時間くらい！！！！

「レベルが、最高だ！……ぎやははは！最高にハイってやつだ！敵がまるでゴミだ！しかし、どんな弱い奴にも俺は容赦をしない！うへへへへ、すまん！」

弱いやつを叩き潰すのはすごく楽しい！！

「あ……いけねえ！寿司作らなきゃ！」

寿司のことをすっかり忘れていた！！！！

すごい集中力！！

「お客さん！今すぐ寿司を作ります！」

ギラクはテレビをカウンターからよけた。

「ずいぶん待ちましたよ」

ポスは不機嫌な様子で、親方の飲みかけのコーヒーを一口飲む！！

「そりゃあ、大変だったな！」

ギラクはポスの頭の部分をうっかり斬りつけた！

そしたら、ガクガク震えちゃってんの！！！！

すぐに寿司に取り掛かるうと、生ゴミを見みると……新鮮だった生ゴミがすっかり腐っている！！！！

「まいったな！生ゴミが腐った！」

仕方ないので、食べかけのマツタケ、何かの魚の身、食べかけのコロッケをミキサーに入れた！

「そして、甘みを出すためにチョコ！これで色もごまかせる！」

茶色い、生臭い液体ができた！！！！

ギラクは茶色い生臭い液体と、茶色いどろどろしたシャリをポスに投げつけた！！

「うぐ！！！！」

「二品目！生ゴミの寿司だ！！！」

「生ゴミを寿司にしちゃったの！？」

ポスがびっくりするのも無理ない！

生ゴミの寿司なんて今までの寿司の歴史にないのだから！

「とにかく食べてみてください！」

ギラクはとりあえずおもらししちゃったの。

「では飲ませていただきます」

ポスは交互に茶色い液体を飲む！！

「おおお！甘い、そして生臭い！」

「秘密はチヨコさ！」

秘密をまたばらした！！！！

「では、三品めの寿司に移ります！！」

ギラクは意味もなくポスをひっぱたいた！！！！

あと、石で頭をすり潰した！！！！

ストレス解消！！！！

「こまったぞ、生ゴミを使い切ってしまった！もうネタがない！こ  
うなったらまた、生ゴミを拾ってくるしかない！」

寿司職人はネタに困ったら、生ゴミを拾いにいくのだ！！

「次のネタはなんですか？」

なんて聞くもんだから、頭にきてまたポスの内臓を取り出して刺身  
にして出した！

「とりあえず、自分の臓器でも食ってろ！俺は、生ゴミを拾って  
くるから！逃げたら、ひどいからな！」

もし、逃げ出したら包丁を持ってどこまでもどこまでも追いかけて  
いくつもりだ！！！！

寿司職人はお客を逃がさない！！！！

絶対に逃がさない！！！！

ギラクは包丁を自分の胸に何度も突き刺しながら、また料亭にやっ  
てきた。

「俺は寿司屋だ！生ゴミをだせ！」

職人はいちいち細かく説明なんてしない、言いたいことだけ言う！

「またですか！」

「生ゴミで寿司を作るんだ！だから生ゴミをよこせ！」

「困りますよ！何度も」

「くどい！生ゴミを出せ」

「は・・・はい」

料亭の板前は、また生ゴミを持ってきてくれた。

「本当に生ゴミですけど」

「俺にとっちゃこの生ゴミが宝に見えるぜ！」

早速、店の中で使える生ゴミと使えない生ゴミを分ける！

「散らかすのはやめてください」

「おまえも生ゴミになりたいのか？」

ギラクは包丁を振り回す！！

「うん？今日はいい生ゴミがないな・・・どうしていい生ゴミがないんだ！」

「そ・・・そんなこと言われましても」

「てめえ！まさか、いい生ゴミ隠してるんじゃないだろうな？俺にいい生ゴミ取られるのが惜しくて、隠してるんだろ！隠してもわかるんだ！早くいい生ゴミを出せ！俺の理性が残っているうちに！さもないと、俺はどうなるかわからないぞ！！」

包丁でギラクは自分の能をぐちゃぐちゃしだす！！

寿司職人は怒らせると怖いのだ！！

「ぐわわわ、店の中でやめてください！」

「ぐわばばば！早く！生ゴミ！この際、生ゴミじゃなくてもいい！！早く、ゴミを出せ」

「は・・・はい」

料亭の板前は、ゴミを持ってきてくれた。

「ゴミですけど」

「俺にとっちゃこの生ゴミが宝に見えるぜ！」

早速、店の中で使えるゴミと使えないゴミを分ける！

「おお、いいゴミがあるじゃねえか！」

ギラクはゴミの中からいいものを拾うと急いで店に帰っていった！店に入るとポスが、大人しく店の中に座っている。

「お待たせしました！いいゴミ見つけてきたから、今から三品めの寿司を作るぞ！」

とりあえず拾ってきたゴミを並べる。

きれた電球、乾電池、延長コード！

「お客さん、ちょっと考えるから待ってて！」

ギラクはポスに石を出す。

「石です！どうぞ」

「あ・・・どうするんですか？」

「ぺろぺろ舐めてください」

これで4時間位は稼げる、この間にきれた電球、乾電池、延長コード！で作れる寿司を考える！！！！

ポスは石を四時間位はぺろぺろ舐めているので、しばらく休息とる！  
疲れた状態で、寿司を作ってもいい物はできない！！

「お客さん！疲れたので休憩します！」

ギラクはお腹が空いたので、食事をとりに寿司屋に向かう。  
食事の時も寿司の事を忘れない寿司人間。

近くにある有名な寿司屋にやってきた！！！！

「親父！お任せで握ってくれ」

「へい」

ギラクはあまり寿司に詳しくないので、お任せ！

出てきた寿司をじっくりと見る！

寿司はまず目で楽しむ！！

ギラクはあまり寿司に詳しくないので、何の魚かはわからない！！

「でわ、いただきます」

むしゃむしゃみんな食べた！！！！

「うん！魚の味だ！チヨコの味がしないじゃないか！！！！」

この寿司はチヨコの味が全然しない！

でもお腹がいっぱいになった！！

お腹がいっぱいになったので、自分の店に帰ってきた！！

ポスはばかみたいに、石をぺろぺろ舐めている！！

お腹がふくれたので、しばらく横になり睡眠をとる！

寝不足では、いい仕事はできない！

たっぷり二十時間睡眠をとって元気が出たので寿司を作る気が出て

きた！

材料はきれた電球、乾電池、延長コード！

「お客さん、このきれた電球をみてください！今きれたばかりで新鮮ですよ」

とりあえず、新鮮と言っておけばたいいの客は騙される！

「まさかそのきれた電球で寿司を作る気かい？」

ポスは驚いている！

「あなたはきれた電球の寿司を食べたことがありますか？」

「いや、ない！」

「へー！勝手に喋るなばか！寿司を食べるときは黙ってる！」

寿司屋は礼儀に厳しいのだ！

こうやってリラックスしたムードを作ること職人には必要なのだ  
！！！！

通ぶった奴は容赦なく罵倒する！

後、たまに包丁で刺す！

ギラクは素早く、きれた電球を床に叩きつけて割る！

その破片をほうきとちりとりで集めると、それを特性のシャリ（チヨコを酢飯に混ぜて、ミキサーで混ぜた物！！）にふりかける！！

「どうぞ！三品目！きれた電球の寿司」

「むぐ！口の中が切れて、血が吹き出る！」

「どうです？斬新でしょ？」

「あまい、うん！あまい」

「へー！勝手に喋るなばか！寿司を食べるときは黙ってる！」

寿司屋は礼儀に厳しいのだ！

通ぶった奴は容赦なく罵倒する！

こうやってリラックスしたムードを作ること職人には必要なのだ  
！！！！

「あなたはきれた乾電池の寿司を食べたことがありますか？」

「いや、ない！」

「へー！勝手に喋るなばか！寿司を食べるときは黙ってる！」



寿司屋は礼儀に厳しいのだ！

こうやってリラックスしたムードを作ること職人には必要なのだ  
！！！！

通ぶった奴は容赦なく罵倒する！

後、たまに包丁で刺す！

そのあと頭を蹴飛ばす！

ストレス解消！

ギラクは乾電池を火で軽くあぶる！！！！

すごい技術！

それを特性のシャリ（チョコを酢飯に混ぜて、ミキサーで混ぜた物  
！！）に乗せる！

見た目にもおもしろい寿司が出来た！

「どうぞ！四品目！乾電池の寿司」

「むぐ！硬い！」

乾電池が硬いのは当たり前！

「どうです？斬新でしょ？」

「あまい、うん！あまい」

「へー！勝手に喋るなばか！寿司を食べるときは黙ってる！」

寿司屋は礼儀に厳しいのだ！

通ぶった奴は容赦なく罵倒する！

こうやってリラックスしたムードを作ること職人には必要なのだ  
！！！！

「あなたはきれた延長コードの寿司を食べたことがありますか？」

「いや、ない！」

「へー！勝手に喋るなばか！寿司を食べるときは黙ってる！」

寿司屋は礼儀に厳しいのだ！

こうやってリラックスしたムードを作ること職人には必要なのだ  
！！！！

通ぶった奴は容赦なく罵倒する！

後、たまに包丁で刺す！

そのあと頭を蹴飛ばす！

そして、鍋でゆでる！！！！

ストレス解消！

ギラクは延長コードに結び目をたくさんつけると、特性のシャリ（チヨコを酢飯に混ぜて、ミキサーで混ぜた物！！）に乗せる！

延長コードに結び目つけることによって、歯ごたえが出る！

そういう工夫！

「どうぞ！最後の寿司！延長コードの寿司」

「むぐ！硬い！」

硬いではなく、歯ごたえがあると言わなければいけない！

「どうです？斬新でしょ？」

「硬い！あまい」

「へー！勝手に喋るなばか！寿司を食べるときは黙ってる！」

寿司屋は礼儀に厳しいのだ！

通ぶった奴は容赦なく罵倒する！

こうやってリラックスしたムードを作ること職人には必要なのだ

！！！！

「どうでしたか？僕の寿司は！ビックリして内臓飛び出して、土星までいっちゃったろ？」

「確かにびっくりしました」

「じゃあ、月刊寿司で特集してくれるんですね？ぶち抜き3万ページ！」

ギラクの寿司を語るのには3万ページでも少ない！

「これは寿司じゃないよ！」

寿司を否定した！

「酢飯にネタがあれば寿司ですよ！いいがかりはよしてください！僕の才能がすごいことはみんな知っています。なのに、そんなことを言うなんて！あなたどうかしてる！」

こんなこと言う人は、頭がどうかしてると思わざる得ない！

「月刊寿司ではこの店のことは書かない！」

これはペンの暴力！

「おお、おのれ！僕をここまで怒らせたのは、あなたが始めてですよ！ジワジワと寿司にしてやる！！」

ギラクをここまで怒らせた人はいない！

「寿司に？」

「待て！お客を寿司にしちゃいけない！お前の手は、お客を寿司にするためのものじゃない！」

店の中で寝ていた、親方がしゃしゃり出てきた！！！！

「親方！この人は、僕の素敵な寿司を認めずに、本にも載せないなんて言うんですよ！こんなもの完全に脳が大噴火ですよ！」

興奮してギラクは、壁をムシヤムシヤ食べた！

案外、おいしい！

「いくら自分が素晴らしいと思っけていても、食べる人が評価しなければダメなんだ！」

寿司の価値を決めるのは職人ではなく、食べる人！

「腐った舌をもった人のレベルに合わせろってのかい？」

「そのとおり！腐った舌の人には腐った寿司を出すんだ！」

レベルにあった寿司！

「親方・・・僕は勘違いしていたみたい。本当、マジでごめん」

「うん。いんだよ。わかればいいんだよ」

親方とギラクは抱き合った！！！！

すぐく師弟の愛！

すかさずギラクが、包丁で親方の腹を刺す！

たとえ師弟でも油断をすればブスリといかれる！

緊張感！！！！

でも親方は慣れてるので、大丈夫！

「あの、本の件はもういいです。僕が間違っていました！だから、早くここから出て行け！」

ギラクは月刊寿司の記者ポスのケツを蹴り飛ばしてやった！

お客のケツを蹴ると気分がすっきりして、ストレスが解消される！

マジでおすすめ！

ギラクが月刊寿司に特集される夢は儚くも崩れ去った！！！！

「親方、取材も終わりました！店も終わりますか？」

あまり、働きすぎはよくない！

健康が悲鳴をあげて、即死してしまう！

健康が即死してしまうと、すごく悲しくなってしまうからだ！

「でも、今日はまだ一人しかお客きてないからなあ」

親方は儲け第一主義の、金の亡者！

親方は、金さえやれば斧で自分の頭だつて割る！

「でも、寿司も飽きたから・・・今日はもう終わり」

親方は寿司に飽きた！

年中ご飯をコネコネしていたら、さすがに飽きる！

「そうこなくっちゃ」

ギラクは喜んだ！

あと、おもしろっちゃった！

「ああ、仕事が終わったからお腹がすいちゃった！」

ギラクはお腹すいた！

お腹がすくとよくない、即死する！

「何が食べたいんだ？」

「うーん。やっぱり肉ですかね」

やっぱり肉が一番！

パワーがつく！

人間は肉だけ食べてれば、元気が出てずっと生きてる！

魚とか野菜を食べる奴はバカ！

すごいバカ！

「うん、いいな肉は！こんど寿司で肉を握ってみるか」

親方は何でも寿司に結びつける！

工夫がすごい！

「肉の寿司ですか？おいしいんですかね？」

肉と酢飯のコラボレーション！

「実際あるらしいよ。わしも雑誌とかでしか見たことないけど」  
親方はすごい情報網！

どんな些細な寿司の情報も逃さない！

「何肉なんですかね？」

「肉と言えば牛だろう！それ以外の肉は、牛になれなかったあぶれた肉だ」

牛以外は認めない！

寿司職人は牛が好き！

「寿司に牛のどの部分を使うんですかね？」

牛は大きいから、いっぱい肉があつて紛らわしい！

「右の方の肉だろうね」

たぶん右のあたり！！！！

左はダメ！

牛の肉の左を使う奴は、素人！

すごい肉のことを知らないバカ！

「じゃあ、肉の勉強を兼ねてステーキでも食べに行きましょうか？」

ギラクはステーキが食いたい！

「おお、いいね！ステーキはいい！」

親方はステーキが好きなので、喜んでおもらししちゃったの！

二人はステーキを食べることにした！

「ステーキってどこで食べられるの？親方は、知ってますか？」

ステーキってどこに、落ちてるんだろう？

「寿司屋にはステーキはないな」

寿司屋にはステーキはない！

「よし、ステーキを食べさせてくれる店を探しにいきましょう！なあに簡単なもんですよ！肉を搜していけばすぐに見つかりますよ」

肉のあるところ、すなわちステーキがあるところ！

「なるほど！早速いこう！肉が食い尽くされないうちに」

肉がなくなると、ステーキは食べられなくなってしまう！

二人は店を出て、ステーキを食べに行く！

道にゴミを散らかしながら歩いていると、若い男が話しかけてきた！！！！

「ハンバーガーはとうですか！おいしいですよ！おいしくて内臓が破裂しますよ！」

おいしいと内臓も木っ端微塵！

「ハンバーガー？なんだいそりや？」

親方はハンバーガーを知らない！

そういう世代！

「親方ハンバーガーってのは、肉を挟んだパンのことです！愚か者の食べ物ですよ」

寿司職人は偏見の塊！

「いやだな！愚か者の食べ物なんて、ふるーい！今、ハンバーガーはすごく賢者の食べ物として広く世間に浸透しているんですよ」

賢者の食べ物ハンバーガー！

これを食べない奴は人間じゃないね！

「ほうほう。では一つ頂こうかな」

「じゃあ、僕も」

二人はハンバーガーを買った！

「むぐ！こいつは、パンと肉の味が！」

パンと肉と味がした！

「なんか頭がよくなった気がする！僕は賢くなった！」

「わしも賢くなった！」

二人は賢者の食べ物ハンバーガーを食べて賢くなった！！

「どうですか？僕のハンバーガーは？」

「こんなもんをうまいの、まずいの言ってもしかたないよ。粘土みたい」

ギラクは吐き出して、道路に叩きつけた！

親方はそれを拾っておいしそうに食べた！

卑しいのが寿司職人！

粘土を食わされているようだ！

「そうですか・・・僕のハンバーガー全然売れないんですよ!」

「売れないのは当たり前だ!」

親方はおいしそうにハンバーガーを食べた!

口からカスがこぼれて汚らしい!

顔も汚らしい!

「なんで、ですか?」

「それが知りたければ、伝説の剣を探すのだ!」

ハンバーガーが売れない秘密は伝説の剣にある!

「伝説の剣?」

「すでにオーガフラッシュフラグメントの封印は解かれた!ジェノサイドドリルの復活が迫っている」

危険が迫っている!

もう時間がない!

「ってことはこのハンバーガーはどうすればいいんですか?」

ギラクはよくわからなくなった!!!

ギラクは親方を道路に叩きつけて、踏み潰した!!!

ストレス解消!

「でも、このハンバーガーは感心しないな」

「どうしてですか」

「口で言うのは簡単なんだけど・・・そうだ!お前の頭をミキサーで粉々に砕いてやろう」

口で言うより行動!

「どうしてだ!なぜ、私の頭がミキサーで碎かれるんだ!」

「もうハンバーガーは飽きた!」

ギラクは飽きた!

「うん、飽きたな!こんなもん、飽きるよ!パンと肉とか・・・冗談だろ?飽きてくれって言ってるようなもんだ」

親方も飽きた!!

「なんでですか!みんなおいしいうって言って、毎日たらふく食べてるんですよ!国民食ですよ!ハンバーガー食べてると頭もよくなる

し」

ハンバーガーはすごい！

驚きの効果！

「パンとパンの間に肉を挟む！パンと肉と一緒に食べられて便利じゃないか！待てよ・・・親方！これって寿司とほぼ同じ構造じゃないですか？」

寿司とハンバーガーは同じ！

見分けがつかない！

似すぎていてムカつく！

「寿司とハンバーガーが同じだって？ハンバーガーは肉とパン！寿司はお米と魚！ああ、同じだ！ぴったり同じ、呼び方が違うだけだ！」

寿司とハンバーガーは呼び方が違うだけで同じもの！

「僕は寿司屋なんだぜ！すごいだろ！偉いんだぞ！」

自慢した！

「ええ！そうなんですか！通りで料理に詳しいはずだ！じゃあ、僕のハンバーガーがもっとおいしくなるように手伝ってもらえませんか？僕が作るとハンバーガーが全然売れないんです！」

こいつが作ると、ハンバーガーがまずくなる！

「いいぜ、まずお前の作ったハンバーガーを土に埋めるんだ！」

まずはハンバーガーを埋める！

ついでに親方も埋める！

見苦しいから！

「ええ！わかりました！埋めます！」

ハンバーガーと親方を埋めた！！

運動すると気分がいい！

するとまたお腹空いて来た！

「そうだ！ステーキを食べにいく途中だったんだ！」

こんなハンバーガーとかどうでもいい！

ステーキから比べれば、ハンバーガーはすごくダメな食べ物！



親方が埋まっているところに、お湯をいっぱい撒いた！！

親方にはずっと苦しんでほしい！

「あの・・・ハンバーガーも埋めたんで、一緒にステーキ食べにいつていいですか？」

「いいよ！僕はギラク！寿司職人さ！超・寿司職人さ！」

「私はハンバーガー職人のまさしです」

パンと肉をいじくって遊ぶハンバーガー職人まさし！

「ところでどこに行けばステーキが食べれるんでしょうか？」

肉を捜せ！

「地面をよく見るんだ！肉が落ちてるはずだ！肉があればステーキもある！簡単な推理ですよ！」

ギラクはすごい推理力を持っている！

名探偵もギラクの前では自殺する！

「肉ですか？そうだ！ハンバーガーがあります！」

ハンバーガー職人まさしは、ポケットの中からハンバーガーを取り出した！

「そのゴミでどうしようと言っただい？」

ゴミで何をしたいんだ！

「このハンバーガーを餌にして、肉をおびき寄せるんですよ！」

肉が見つけれないなら、おびき寄せればいい！

「やってみるよ！たかだかハンバーガー職人！」

寿司職人からみればハンバーガー職人はすごく位の低い職人！

寿司職人の奴隷！

「はい」

まさしはハンバーガーを地面に仕掛ける！

すると、変な男がハンバーガーを拾って口に入れた！！

拾った物は躊躇しないで口にぶち込め！

「貴様！僕は寿司職人！偉いんだ！君は肉だね？ステーキを出しなさい」

さっさとステーキを出せ！

「わしは肉ではない・・・親方だ！」

なんとハンバーガーを拾って食べたのは、親方だった！  
土に埋めて、苦しめたのにまた出てきやがった！

本当にしぶとい！

「親方！なんでこんなところに！」

「土に埋められていたんだ！」

「僕が埋めたんだよ」

まさしは得意顔！

「ふざけてないで、ステーキを食いにいくぞ！知り合いのステーキショップがあるんだ」

親方は顔が広いのでステーキショップを知っていた！

三人はステーキショップについた！！！！

「親方の知り合いにうまい物を作る人がいるんですか？」

「味は最低だぜ」

味は最低！

「僕はハンバーガー」

まさしはハンバーガー！

「まずいステーキを食べようじゃないか」

「はい」

三人は店の中に入った！

ギラクは店の中の物を蹴り飛ばした！！！！

客は何をしてもいい！

まさしは店の中にハンバーガーを撒いた！

春には綺麗な花が咲く！

親方は窓ガラスを割って回る！

熱い！窓があると熱くて、いられない！

そういう時は、窓ガラスを叩き割る！

「いらつしやいませ！あ、親方久しぶりですね！寿司の調子はどうですか？」

ステーキショップ、饅頭のシェフが言った！

「人に食い物を作ってやるなんてバカだよな！」

親方は寿司作りも飽きていた！

「早く！ステーキを持って来い！」

ギラクは包丁で親方を少し半分にした！！

「はい」

「焼き方はどうします？」

「焼き方？ いったい焼いてくれ」

ステーキには焼き方がある！

通はいったい焼く！

それ以外はバカ！

「じゃあ、僕も！」

まさしはバカだからよくわからない！

「わしはちよつとだけ焼いて」

親方はバカだからちよつと焼く！

三人は肉を食べた！

まずくて肉を三百メートル投げた！

肉はまずい！

こんなもの食うのはバカだ！

最強は寿司だ！

肉は最低！

寿司を食べば、頭がよくなって長生きできる！

肉を食うとすぐ死ぬ！

即死する！

「肉は即死するな」

「ええ！こんなものバカですよ！超バカ！ハンバーガーの方がいいですよ！」

「親方！不愉快ですよ！なんですかこの肉とか言っつのは！ムカムカしますよ！早く、帰って寿司を作りましょう！」

肉を見terると命がどんどん縮まっていく！

「そうだな！寿司だな！帰ろう！」

三人は店を出た！

肉を焼いて食べさせるなんて馬鹿げている！

人間は寿司だけを食べていればいい！

「寿司を作って世界を救いましょう！肉を世界から駆逐しましょう！」

「そうだな寿司だな」

「おっとハンバーガーも忘れてもらっちゃ困りますよ」

ハンバーガーと寿司で世界は救われる！！！！

三人が店に帰っていると、魚屋さんがあった。

「あつ！魚屋さんだ！生臭い匂いがプンプンするぜ！」

魚は生臭い！

「それは魚が新鮮じゃないからだよ。新鮮な魚はとれたての果物のようなイイにおいなんだ」

「ハンバーガーは生臭くないですよ」

ハンバーガーは生臭くない！！

「ちよつと魚屋を覗いていこう」

親方は魚が大好きなので、魚屋があるついでに見たくなる！！

「めんどくせーな」

ギラクは魚には興味がない！

むしろ嫌い！

魚屋は魚がたくさんある店！

「おい、ギラク！この魚がなんだかわかるか？」

親方は魚を指差した！！

「カレーですか？」

「まさしはわかるか？」

「ハンバーグですかね？」

「違う！似てるけど違う！アジだ！」

カレーやハンバーグに似ている魚アジ！！

「これがアジ！噂には聞いたことあるけど、こんな魚なんだ！気にいらねえ顔してやがる！」

ギラクはアジをブンブンと振り回した！！

「僕も振り回す！」

まさしもアジを振り回した！

アジを振り回すと楽しい！

イエーイ

「しかしアジなんてゲスな魚うまいんですか？」

「なぜ、そう思う？」

「形がかっこ悪いから」

形がかっこ悪い魚は、大体不味い！！

「あれ？」

まさしがアジをペロペロ舐める！

「どうした？何か気がついたか？」

「気持ち悪い味がします！」

生のアジをペロペロ舐めると、気持ち悪い味がする！！

「そうか、よく気がついたな」

まさしは気がついた！

「親方！このアジからは生臭いにおいしくない！果物のようなにおいはしないよ」

ギラクは気がついた！

「そうか、よく気がついたな！このアジは生臭いからみんな腐っているんだ！」

「そうか・・・どうりで生臭いはずだ！こんなものこうしてやる」

ギラクは腐ったアジを投げた！

「魚の目利きは難しい、勉強しなければ悪い魚を買わされてしまうんだ」

「親方、アジをハンバーガーに挟んで食べると、気持ち悪い味がします」

「そうか、よく気がついたな」

親方はまさしの腹を執拗に蹴飛ばした！！！！

「海老があるな」

親方は海老を手にとってぎゅーって握った！

柔らかいのは新鮮じゃない！

「どうですか？」

「柔らかい！こんな海老は食えない！完全に腐ってる」

柔らかい海老は完全に腐っている！

「完全に腐っている！！！！」

「あれ？」

まさしが海老をペロペロ舐める！

「どうした？何か気がついたか？」

「気持ち悪い味がします！」

生の海老をペロペロ舐めると、気持ち悪い味がする！！

「そうか、よく気がついたな」

まさしは気がついた！

「親方！ここの海老柔らかいよ！みんな腐っている」

ギラクは気がついた！

「そうか、よく気がついたな！ここの海老はみんな腐っているんだ！」

「そうか・・・どうりで柔らかいはずだ！こんなものこうしてやるギラクは腐った海老を投げた！

「海老の目利きは難しい、勉強しなければ悪い海老を買わされてしまうんだ」

「親方、海老をハンバーガーに挟んで食べると、気持ち悪い味がします」

「そうか、よく気がついたな」

親方はまさしの腹を執拗に蹴飛ばした！！！！

「ここの魚屋はダメだ！みんな魚が腐ってやがる！」

親方の目利きはすごいので、腐っているかどうかわかってしまう！！！！

スーパ―超能力目利き！

すごい奇跡！

隠してもすぐわかる！

「そうですね！ここの魚屋はゴミの山だ！」

ゴミ屋敷！

ギラクは魚屋のおやじに唾を吐きかけた！

気に入らない時には唾を吐きかけろ！

「ここの魚屋はハンバーガーないので、バカですよ！」

ハンバーガーもない魚屋なんて火がついて、燃えてしまえばいい！

「いつものスーパー永眠で魚を仕入れよう」

新鮮な魚を手に入れるには、スーパー永眠が一番だ！

安いし、魚が切つてあつてすぐに寿司にできる！

「そうですね！永眠にいきましょう！この店はおかしい！魚屋なのにおかしい！魚が腐りすぎだ！」

こんなに魚が腐ることがあると思いますか？

「こんな店・・・」

「待て！俺が言つてやるよ！こんな店潰れちまえ！」

ギラクはおもらししちゃったの！！

三人はスーパー永眠にやってきた！

ここはすごく安くて悪い品物がそろっている！

「ひゃっほーう」

ギラクは包丁で次々に野菜を切り刻んでいく！！！！

「ころころ」

親方は意味不明な言葉を喋った！！

「早くこの手に捕まるんだ」

まさしは親方に手を差し伸べた！！！！

やさしさ！

「お前の手なんて簡単に噛み千切れるんだぜ！！！！」

親方の歯はダイヤモンド！！！！

「親方、早速魚を仕入れましょう！明日はどんな寿司を出すんですか？」

メニユーを考えてから魚を仕入れるのが、賢い寿司屋！

いっぱい仕入れちゃうのは、バカ！

「そうだな、まずマグロだな」

寿司の中で一番偉いマグロは仕入れないといけない！

マグロがあれば他はなんでもいい！

「あと肉がないと、ハンバーガーが作れませんよ」

まさしは寿司屋でもハンバーガーを作る気だ！

「じゃあ、肉も買おう」

肉はすごく偉い食べ物！

すごく長生きできる！

三人は魚コーナーにやってきた！

「親方に、魚の目利きの仕方はないましたから！余計な口出しはしないでくれ」

ギラクは親方の頬を包丁の刃の方で打つ！

師匠と弟子といってもこの世界では厳しいのだ！

魚の良し悪しは指でぎゅーとやって調べる！

柔らかいのはダメだ！

腐ってる！

ギラクは片っ端から、マグロのパックを指で押しつぶす！

「柔らかい！腐ってる！このマグロは腐ってばかりいる！」

わざと腐ったマグロを入れているとは思えない！

こんなマグロはこうしてやる、親方の目にどんどんとねじ込んでいく！

「親方の目にはマグロは入らない！」

親方の目にはマグロは入らない！

「親方、このマグロはみんな腐ってますよ！みんな柔らかい！親方の餌にもならないような、まぐろばかりですよ！」

こんなマグロ、親方でも食べない！

ギラクはまさしを包丁で刺した！

ストレス解消！

「ちよっと待ちな。そのマグロだってこれからは食べられなくなる



かもしれないんだぜ」

「なんだって！」

「おまえは何者？」

まさしはマグロのパックを足で踏み潰した！

ストレス解消！

「私は釣り人！世界中の魚を釣ってる人だ！」

世界を釣る人！

「その釣り人がなんだ！いいかげんなこと言うと、ぶっ殺すぞ！」

寿司職人はいいかげんなことを言う奴は、ぶっ殺す！

「いいかげんなことじゃないよ！マグロは減っているんだ！」

マグロが減っている！

「親方、マグロが減ってるって本当なんですか？」

「うむ、寿司職人の間では噂にはなっている」

噂！！！！

「なんで、ですか？」

「ハンバーガーのせいですか？」

「いや、マグロとハンバーガーは関係ない！」

ハンバーガーは関係ない！

「それを聞いたら安心しました！」

まさしはハンバーガーを近くにいた、子供の鼻の穴に押し込んだ！

ストレス解消！

「マグロが減った原因はなんなんですか？」

まさしはハンバーガーをおじいさんに食べさせた！

ストレス解消！

「マグロが減った原因？環境破壊さ！君は海に行ったら、まず何を  
する？」

「海に行ったら？まず、家庭のゴミを捨てます！後は、洗剤を撒い  
たりします」

寿司職人は海にゴミを捨てたり、洗剤を撒いたりする！

「わしもゴミはなるべく海に捨てるようにしてる」

親方はわざわざ、海にゴミを捨てに行く！

「それだよ！マグロが減った原因は」

「はあ！？なんでゴミを海に捨ててマグロが減るんだよ！むしろ餌が増えてマグロが増えるんだよ！世界の為になってるんだよ！超世界平和！なんだ！」

海にゴミを捨てると、世界の平和が泳いでやってくる！

「海にゴミを捨てないで、どこにゴミを捨てるんだ！おまえはエコロジーが全然ダメだよ！」

「ハンバーガーだって海に捨てるぜ！」

まさしはハンバーガーを海に捨てる！

「海が汚れたら、そこに住んでいるマグロはすごく元気がなくなるんだ！」

マグロは海が汚れると元気がなくなる！

「そうか、マグロはもう食べられなくなるのか！ちくしょう」

ギラクはスーパーにあったマグロのパック全部を叩きつけて、踏み潰してやった！

「釣りもできなくなるな」

海が汚れると、魚の元気がなくなるので釣りはできない！

「ハンバーガー」

「ギラク、これからの寿司職人は魚が使えなくなる！なぜなら、魚の元気がなくなるからだ」

魚はもう使えない！

「親方！それはすごい大変ですよ！魚のない寿司なんて！」

寿司と魚はすごく大切な友達！

「ああ！大変だ！でも、大丈夫！魚以外の物を使えばいいんだ！魚がなければ、魚以外の物を使えばいい！

寿司はすごく対応力がある！

「そうか！釣りも、魚以外の物を釣ればいいんだ！」

釣りもすごく対応力がある！

「よし！これからは魚はもう使わない！」

魚はもう使わない！

魚を使う寿司屋は全然、エコロジーじゃない！  
すごいバカ！

「じゃあ、俺も早速イチゴを釣ってくる！これからは魚じゃなくて、  
果物を釣る時代だよ」

魚を釣る奴は全然、エコロジーじゃない！  
すごいバカ！

「魚以外の食材で寿司に合うものですか？」  
寿司に合う食材を探さなくてはいけない！

「ギラク、そういう考え方は違うと思うぞ」  
違う！

「どういうことですか親方？」  
「ハンバーガー」

「ギラク！寿司に合うか合わないかなんてどうでもいいんだよ」  
寿司に合うかどうかなんてどうでもいい！！

「そうか！そういう寿司に合う食材というくりが、発想を小さく  
してしまうのか！」

酢飯に何かのつけければ寿司！  
「その通り！寿司と言うのは、合う合わないなんて小さなことに気に  
しない！」

「ハンバーガー」

「つまり食べられればいいわけですね」  
「食べられなくてもいい！」

食べられなくても寿司！  
個性を尊重して欲しい！

「悪い冗談だぞ！何を考えてんだ！」  
ギラクは親方をぶちのめした！

「ごめんなさい」  
親方は暴力には弱い！

「ハンバーガー」

まさしはすごいバカ！

「親方！じゃあ、今日は何を仕入れていくんですか？」

「魚以外の何か？」

「親方！焼き鳥なんてどうですか？」

まさしはハンバーガーの次に焼き鳥が大好き！

鳥を見ると火をつけたくなる！

「わしも焼き鳥は大好き！寿司より好きだよ！食べると中からおいしい汁がジューグバアと口のなかに出てきて、口からベトベト出てくるあの感じ」

親方は汚らしい！

「じゃあ、寿司に焼き鳥をのせるんですか？」

寿司と焼き鳥！

酢飯の上に焼いた汚らしい鳥！

「そうだな！焼き鳥と寿司！すごい、二大スター競演じゃないか！」

二大スター！

日本が大パニック！

みんなびっくりしておもらししちゃう！！

「ああ、焼き鳥おいしそう！寿司は臭くて食べたもんじゃないけどな」

まさしは寿司が嫌い！意味嫌っている！

寿司を見るとたまに即死することもある！

「親方、焼き鳥と言ってもいろいろありますよ」

焼き鳥はいろいろある！

ギラクは研究熱心なので知ってる！

普通は知らない！

「え！？そうなの？何ということだ！わしは焼き鳥のことを何もしなかった！今までわしは何を食べていたんだ！わしは通なのに！」

「たぶん、親方が食べていたのはアスパラガスです！焼き鳥屋でもまともでない店では、焼き鳥と言ってアスパラガスを出すのです」

「ぐわあああどつりで、緑の色が深くて鮮やかなわけだ！あれは

大地の恵み」

親方は焼き鳥通だけど、焼き鳥のことを何も知らない！

「僕も焼き鳥だって言われれば、ハンバーガーが出てきても気がつきませんよ」

素人は焼き鳥の区別すら難しい！

「ギラク、おまえ焼き鳥に詳しそうだな？」

「以前、拾って焼き鳥をよく食べていました」

ギラクは以前焼き鳥を拾って食べていたので、詳しい！

「そうか・・・それならば詳しいはずだ」

「親方、ここはギラクさんに任せましょう」

「そうだな、ギラクが一番焼き鳥に詳しそうだからな」

「では、僕が焼き鳥を目利きしましょう！」

ギラクが焼き鳥の目利きをする！

「ところで、スーパーのどこに焼き鳥があるんだ？」

親方は何も知らない！

鳥とキャベツの区別もつかない！

「親方、焼き鳥は鶏肉コーナーじゃないですか？」

まさしはバカ！

「素人は焼き鳥と聞くと、鶏肉コーナーに行こうとする！それはすごいバカなんですよ」

それはバカ！

「じゃあ、どこに焼き鳥はあるんだ？」

「お惣菜コーナーですよ！」

盲点！

焼き鳥はお惣菜コーナー！

「さすがギラクさん！」

焼き鳥を求めてお惣菜コーナーにやってきた三人！

「うわあ、いろんな食べ物が綺麗に並べられて目が回るよ！」

まさしは目が回った！

「ばかやろう！わしは全然平気だぞ！」

親方は平気！

普段から鍛えている！

「俺たちの目的は焼き鳥だけです！他のお惣菜はいりません」

焼き鳥以外のお惣菜は、床に叩きつけてしましましょう！

「いえーい、鯖の味噌煮はなんで、焼き鳥じゃないんだ！」

まさしは鯖の味噌煮を床に叩きつけた！

汁が飛び散って、親方の目に入った！

トラブル発生！

目はすごく、人間の体の中でも大事な部分！！！！

壊れるとたまらなく困る！

「あ！親方すいません！」

まさしは、親方の目に鯖の味噌煮の汁を塗りつけた！

まさに偶然！

「ぐわあああ、何をするんだ！」

「ほほう、いいにおい！」

ギラクは親方の目から、鯖の味噌煮のいいにおいがするので涎を垂らした！

「なんとも香ばしい！ああ、お腹が」

まさしはお腹が減った！！！！

「おい、まさし！おまえに鯖の味噌煮の味がわかるかい？」

「鯖の味？わたしは今まで、いろいろなゴミを拾って食べてきましたけど、鯖は食べたことないですよ！もちろん踏み潰したことはありませんけど！」

鯖を食べたことがないまさし！

すごいバカ！

酸素を無駄に吸う！

「料理人はいろんな味を知らなければいけない！その、床に落ちた鯖の味噌煮を食べてみる！」

職人は舌がすごく大事！

なんでも拾って食べて、舌を鍛えないといけない！

「はい！拾って食べます！」

まさしは鯖の味噌煮を拾った！

「けしからん！」

親方は、まさしから鯖の味噌煮を奪い取った！

「なにやにをするんですか！この泥棒やろう！生きて帰れると思うなよ！」

まさしは親方を突き飛ばした！

あと蹴り飛ばした！

あとこんがり綺麗に焼いた！

あと蒸した！

そして油を抜いて、冷まして薄切りにした！

「職人はいろんな味を知らなければいけないだろ？聞いたふうなことを！言うだけならなんとでも言えるわ！それで、拾い食いとは！」

親方はまさしから奪った、鯖の味噌煮を口に放り込んだ！

鯖の味噌煮が舌の上に色鮮やかな色彩を描いたりした！

「噛むと鯖の風味が口の中に広がって、味噌の味と合わさっておいしい味がする」

「う、ぬぬぬ！ずるい！」

まさしは親方を突き飛ばした！

あと蹴り飛ばした！

あとこんがり綺麗に焼いた！

あと蒸した！

そして油を抜いて、冷まして薄切りにした！

「お前たちふざけるのもいい加減にしろ！みんな迷惑がかかるだろう！スーパーでふざけるなんて、人間の感性が狂っている！人間の質が悪い！非常にお前達には落胆させられる！」

ギラクは落胆した！

「すまん」

親方は謝った！

「謝ったぐらいでは誠意が伝わらない！」

謝るぐらいではダメ！

「では、どうすれば？」

「鰹のたたきのように軽くあぶる」

刺身も悪くないが、少し火を通してやると柔らかすぎて歯ごたえのない親方がしまる！

「な！親方を鰹のたたきのように軽くあぶるって言うの？」

親方はブルブル震えちゃってんの！

バーカ！

「僕は親方をおむすびの具にして海苔で巻きたい」

まさしは親方をおむすびにしてやりたい！

きつと臭いおむすびが出来る！！

「おまえら！親方だぞ！偉いんだぞ！」

親方は弟子より偉い！

「冗談ですよ！親方！そんなことより、早く焼き鳥を探しましょう

！早くしないとぶっ殺すぞ！」

ギラクは舌をペロリと出した！

あと、親方の顔を生ハムで包んだ！

親方の顔は見苦しい！

地球の環境を破壊している！！！！

「ギラクさん！これは焼き鳥でしょうか」

まさしがギラクにお惣菜を見せた！

「うん！これは違う！これは骨付き仔羊の背肉のローストだ！」

焼き鳥とは全然違う！

「ああ、何が悪かったの？」

「目が悪い！あと頭も悪い！」

いろんなところが悪い！

体の部品を捨てたほうがいい！

ほとんど呪われている！

「それだけわかっておられるなら間違いありません」

間違いなくまさしは悪い！



「まったくだ！まさしはどうしようもないよ！これが焼き鳥ってもんだよな！ギラク！」

親方がギラクにお惣菜を見せた！

「これは！ニンジンですね！焼き鳥とは全然違う！こんな物を選ぶとは！！！親方に火を放ちたいですよ」

ギラクは親方に火計したい！！

「うぬぬぬぬ！！！！わしに火をつけられたら、非常に困る！」

親方は非常に困る！

「これが焼き鳥です」

ギラクはパックに入った焼き鳥を手にとった！！！！

「うおおお、これが焼き鳥！見事だ！惚れ惚れするよ！」

親方は興奮した！

汚い顔が余計に汚くなった！

「汚い顔ですね！その首をさらして見せしめとしたいですよ」

ギラクは包丁を振り回した！！！！

「親方は自分の汚い顔に自信を持っているんですよ」

「それだけにちよつとしたことでも汚い顔になるんです。汚い顔の者はかえって汚い顔に溺れると言う」

「うぬぬぬぬ！親方をバカにしおって！」

「ああ！バカにしたよ！」

ギラクは親方をバカにしたことを認めた！

潔い！

「まったくこやつは」

親方はため息をついた！

汚い息が口から出た！

親方の息は臭いので、息をしないでほしい！

吸っても良いけど、吐かないでほしい！

切実に思う！！！！

「ギラクさん！焼き鳥を一つ食べてみていいですか？」

お金を払わないで、焼き鳥を食べようとするまさし！！！！

ハンバーガー職人はルールに縛られない！

「いいぜ！ラップを引きちぎって、口に放り込んでみるよ！」

「はい」

まさしが口に焼き鳥を放り込む！！！！

「信じられん！この豊かで濃密な味、こくがあつてなおかつ芳醇で！！こいつあ、うめえや！」

まさしは、焼き鳥がおいしくてみんな食べてしまった！！！！

「あきれたくいしんぼうだな！」

ギラクはまさしの腹をポコポコ叩いた！

「うぐわあああ」

「おっとまだだ！まだ、終わりじゃないぜ！

ギラクはまさしの腹をポコポコ叩いた！

「うぐわあああ」

「おっとまだだ！まだ、終わりじゃないぜ！

ギラクはまさしの腹をポコポコ叩いた！

「うぐわあああ」

「もうやめて！」

親方が叫ぶ！

息が臭い！

「うぐは！す、すみません」

口からまさしは、焼き鳥を出した！

おもしろい！

「ふっふっ！それでいい！自分から進んで謝るとは偉くなったじゃないか」

ギラクはまさしを褒めた！

「まさしが一度食べた焼き鳥！」

親方はまさしの一度食べた焼き鳥を手を取った！！！！

匂いを嗅いだ！

「おっおっ！なんだ！この匂いは！腐っている！この食べ物は腐っている！捨ててくれ！」

大騒ぎする親方！

「この焼き鳥の香りが何だと言うんですか！」

ギラクは親方の鼻を蹴り飛ばした！

まるでサッカーのように！

「いや・・・その・・・何と言ったらいいか・・・」

「これを買いましょ！焼き鳥であることには違いないんだ！」

焼き鳥であることは変わらない！

ピンチはチャンス！

「この焼き鳥を工夫して、おいしくしようと言うんですか？」

まさしは驚いちゃってんの！！！

「長い間、寿司職人をしているが・・・どうしたらいいかわからん

！わしの頭はどうかなくなってしまいそうじゃ！」

親方の頭はショットしてしまった！

寿司職人の頭はよくショットする！

あと、火がついたりもする！

よくあること！

「さあ、店に帰りましょう！」

早く帰らないとせつかく買った、焼き鳥が腐る！

食べ物はずぐ腐る！

「お・・・おい！まだ、清算がすんでいないぞ！」

お金を払わないと万引きGメンがやってくる！

「そんなモノどうだっていいよ！焼き鳥さえもらえれば！」

ギラクは焼き鳥さえもらえればどうでもいい！

「前に一度万引きGメンに捕まったことを忘れたか！」

一度ギラクと親方は万引きGメンに捕まった！

その時は嘘をついたので助かった！

万引きGメンに捕まった時は嘘をつけ！

「一度捕まったからって、二度捕まるとは限らないだろ！」

一度くらいでビビル親方はバカ！

「ええ！ひどすぎるわ！急に暴君になる男の人がいるって聞いたこ

とがあるけど、あなたもそうなのね！私、一生懸命してるのに！ギラクがこんな乱暴で残酷な人だなんて！」

親方は焼き鳥を持って、走って行った！

「おっおい！ええい！不愉快だ」

「親方・・・泣いてましたよ！いんですか！追いかけて」

「焼き鳥を取り返さないと！」

殺してでも奪うんだ！

ギラクとまさしは、焼き鳥を持って逃げた親方を追いかけた！！！！するとスーパ―の前で万引きGメンに捕まった親方がいた！！

「親方！」

「す・・・すまねえ！」

親方は万引きGメンに取り押さえられている！

「おまえ！二度目だぞ！おとなしくこい！」

「わかった！手荒な真似はよしてくれ！おたがい紳士どうし、話合いで解決しようじゃないか！」

親方は紳士、万引きGメンも紳士！

「親方、何があつたんですか？」

まさしは親方のわき腹を蹴る！蹴る！

「ゲフ！え・・・ああ・・・いいんですよ」

「何があつたかおっしゃいなさい！」

ギラクは親方を床に叩きつけた！！！！

まるで親方がゴムまりのように弾む！！

「いや、別に・・・焼き鳥を盗んだんだ・・・」

やつと白状した親方！

「なに！それは親方が悪い！なんちゅう無神経な男なんだ！」

「んで、その問題の焼き鳥は」

「これじゃ」

親方はギラクに焼き鳥を渡した！

ギラクは親方の顔に唾を吐きかけた！

「ありがとよ！親方が地獄から帰ってくるまで、寿司屋は俺とまさ

しでめちやめちやにしてやります！心配しないでください」

「ギラクさん！死んだ親方の分までめちやめちやにしてやりましよう」

二人は死んでしまった親方の分まで、店をめちやめちやにすることを誓う！

「いいかまさし！この焼き鳥は親方の形見だ！大切にするんだぞ」

ギラクは焼き鳥を床に叩きつけて踏み潰した！！！！

まさしも踏み潰した！

形見の焼き鳥はぺっちゃんこ！！！！

「よし！俺の店に帰ろうぜ！」

「そうですね」

二人は新たな闘志を燃やして、ギラクの店に帰る！！！！

「おい！お前は事務所にくるんだ」

親方は事務所に連れて行かれた！

焼き鳥を盗んではいけない！

捕まって当たり前！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4880c/>

---

お寿司屋さん物語

2010年10月28日07時40分発行